

人権・平和部会

I. 研究概要

1. 研究課題

「共に生き、平和な社会を創り上げる力を育むにはどうあればよいか」

2. 研究内容

(1) どのように平和教育を位置づけ、実践していくか

【研究内容①】

- ・教科における平和教育の実践
- ・教科外における平和教育の実践
- ・平和都市宣言と平和教育の実践

(2) どのように人権・共生教育を位置づけ、実践していくか

【研究内容②】

- ・アイヌ民族 ・人権教育
- ・男女共同参画 ・子どもの権利条約
- ・バリアフリー ・インクルージョン
- ・ノーマライゼーション ・福祉
- ・少数民族 ・労働者の人権
- ・しょうがい者の人権

3. 研究方法

(1) 交流計画

部会員個々で実践を積み、研究協議会当日は全体会でのレポート交流と分科会討議（各部会員の実践レポートの交流）

(2) 分科会構成

管内1ブロックで研究内容に沿って分科会を構成し、研究成果の交流を行う。

会場：石狩教育研修センター

Ⅱ. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

- 5月 7日 部会役員研修会
・・・今年度の方向性についての確認
- 6月 2日 部会情報発行
・・・課題部会研究協議会に向けて・実技研修会の案内
- 6月23日 部会役員研修会
・・・実技研修会の計画と具体的準備
- 7月29日 実技研修会
・・・『「はだしのゲン」のつくりかた』
講師：阿部 実氏（恵庭市立松恵小学校） 研修センター
- 8月20日 拡大役員研修会
・・・研究協議会開催について・討議の柱の確認・分科会の進め方
- 9月 1日 管内研究協議会
・・・提言、レポート発表を主とした交流
- 部会役員研修会
・・・研究協議会の反省
- 10月20日 部会役員研修会
・・・今年度の研究のまとめと次年度に向けて

(2) 部会役員研修会での研究成果

- ・研究課題の明確化
- ・理論・実技研修会の持ち方、内容の検討
- ・研究協議会に向けての方向性の意思統一、討議の柱の確認、分科会の進め方

2. 課題部会研究協議会での交流

研究協議会では、全体会での提言レポート等を通して交流し、分科会で個人レポートの交流を行う。実践交流のほか、情報交流、学習など幅広い内容で交流を行う。

(1) 全体会提言レポートの概要

◎提言者：新篠津小学校 葛西 良一 教諭

◎レポートの概要

「新篠津小の平和・人権教育のとりくみ」



①新篠津小の平和教育の特徴

校務分掌の中に「平和・人権教育の推進」が位置付けられ、目標・学習目標・指導内容が設定されている。また、指導内容についても教育課程に平和教育として位置付けている。

②2012年度 子どもたちに行った実践

Web上の動画を教材として使い、YouTubeの『フジテレビ2007「はだしのゲン」原爆投下』を使用して平和教育を行う。ネット上の動画を資料として活用すると負担も少なく実践することができる。

③2013年度 とりくんだ実践

『早咲きの花』という愛知県豊橋市を舞台に昭和時代の太平洋戦争を描いた映画をもとに作成された台本と、宗田理の原作「早咲きの花 子どもたちの戦友」に書かれたものを加えて台本を作成。台本を渡す段階から学芸会まで一貫して劇指導とともに平和教育にとりくむことができる。



④成果と課題

【成果】

- ・校務分掌、教育課程に位置づけて、全校で取り組んでいる。
- ・Web上のものなど、比較的容易に資料を用意して実践できている。
- ・学芸会の劇で取り上げると、比較的長い時間をかけて人権・平和教育を実施できる。

【課題】

- ・各地域、各校にあった、できる「人権・平和教育」をみんなですすめることが大切。

(2) 課題部会研究協議会での協議内容

討議の柱1

どのように平和教育を位置づけ、実践していくのか。

(小学校)

(1) 小学校での実践の紹介

- ・平和集会 ・道徳に位置づける
- ・教育課程 ・全校集会
- ・児童会活動 ・学芸発表会
- ・石狩空襲のパネル展
- ・学級指導



(2) 討議の内容

- ①教育課程や道徳に位置づけられていると実践を継続できる。
- ②児童会活動の一環として取り組むことができる。
- ③ほとんどの子は平和を望んでいる。子どもたちに考えさせながら、平和教育を進め、伝えるべきことを大切に取り上げる。

討議の柱1

どのように平和教育を位置づけ、実践していくのか。

(中学校)

(1) 中学校での実践の紹介

- ・教科（英語・社会等）で行う実践
- ・教育課程に位置づけられている
- ・道徳で行う実践
- ・生徒会活動
- ・短学活 ・新聞の活用
- ・学級通信
- ・DVD、VTR の活用



(2) 討議の内容

- ①教育課程に平和教育として位置づけ、全校道徳等で実践。
- ②学年で掲示物を貼るなど、共通した実践を行っている。
- ③新聞記事やインターネット、メディアを活用する。
- ④各教科で様々な教材、場面で取り組んでいる。
- ⑤小学校からの取り組みが中学校での平和教育につながる。

討議の柱2

どのように人権・共生教育を位置づけ、実践していくのか、

(1) 実践の紹介

- ・全校道徳での実践
- ・教科での実践
- ・教育課程への位置づけ
- ・修学旅行
- ・平和都市宣言と関連させて



(2) 討議の内容

- ①全校道徳において、講師を呼んで、命に迫った取り組みをする。
- ②子供の権利条約と関連させて、学級憲法（目標）を自ら決めさせて取り組む。
- ③インクルーシブ教育について。
- ④教育のユニバーサルデザインについて。
- ⑤アイヌ民族の学習における「開拓」の意味について。
- ⑥修学旅行で北方民族資料館での学習。
- ⑦教育課程へ位置づけることが重要である。

Ⅲ. 講演会（実技・理論研修会）

1. 講演会（実技・理論研修会）の内容

（1）目的

今日的な課題に関わる研修会を実施することにより、様々な教育課題に適切に対応できる能力の向上を図る。本研修は、劇についての指導法を学習することにより、人権教育・平和教育を実践するための基本的な指導力を身につけることを目的とする。

（2）研修会テーマ

『「はだしのゲン」のつくりかた』

（3）開催期日 平成27年 7月29日（水）

（4）講師 恵庭市立松恵小学校 教諭 阿部 実 氏

（5）会場 石狩教育研修センター

（6）概要

①学芸会で平和教材を

平和に関する今日の情勢を踏まえた上で、我々は憲法の精神に則った「平和で民主的な国家及び社会の形成者の育成」のために、戦争や平和、憲法を教える教材を学芸会で取り上げることが大切である。

②劇「はだしのゲン」のつくりかた

- ・学芸会の練習期間で、子どもたちと一緒に平和について考える時間を作る。
- ・劇を演じることにより、戦争の疑似体験を。
- ・演劇の成功は、脚本7割、配役・役者2割、演出1割。
- ・「声を出す」、「笑う」「泣く」の演技指導。セリフは強一弱、高一低、速一遅。
- ・キャスティングの大切さ。決まった役に自分で名前を付け、履歴書を書く。
- ・1週間単位での練習構成。実際に作成し使用した小道具の紹介。

③劇「はだしのゲン」鑑賞

阿部先生が以前に指導した「はだしのゲン」のVTRを鑑賞。



2. 実技研修会の成果

2年連続、阿部先生に講師を依頼しての実技研修会となったが、「また来年も阿部先生の実技研を行ってほしい。」という要望が出るほど、有意義な研修会になった。戦争・平和を取り上げた劇の指導についてオーディションから本番までの具体的な流れを聞くことができ、参加された先生方が今後の実践に参考にしやすいものとなった。「笑い」の演技指導や、実際の小道具の紹介も参加者の興味を多く惹きつけるものとなった。

IV. 部会研究の成果と課題

1. 成果

- (1) 石教研課題部会研究協議会は、教師の実践を交流・情報交換ができるので、とても貴重な時間となっている。
- (2) 小中の人権・平和教育のありかたを交流できるとても貴重な機会となっている。
- (3) 私たちが正しい情報を得て学び合い、その情報を子どもたちに伝えることで、子どもたちの知識や理解が深まり、適切な判断力につながった。
- (4) 各部員の問題意識が高いため、レポートの本数が多く、内容が多様で充実している。
- (5) 講師の方のご協力により、実技研修会が充実したものとなった。
- (6) 役員研修会などを事前に開催し、部会役員と司会・記録者が話し合い、討議の内容と分科会の進め方を明確にしたり、焦点化したりすることで、活発な議論が行われた。

2. 課題

- (1) 内容がマンネリ化しないよう、子どもの実態や特性等に合わせて実践をすすめる。
- (2) 実践が単発に終わってしまうのではなく、系統立てて継続的に行う。
- (3) 多くの学校で平和教育を教育課程や道徳に位置づけたり、平和集会など全校的な活動を行ったりできるように、条件整備を進めるための手立てを共有していく。
- (4) 教育課程に位置づけられている地域では、児童・生徒の平和・人権に関する意識が育っているのか検証することも大切である。
- (5) 様々な場面で「共に生き、平和な社会を創り上げる力」を育むために、個人で実践を行うのではなく、職場内の共通理解・協働体制で実践を積み上げていく。
- (6) 私たちが色々な情報に対して知識や理解を深め、子どもたちに伝えていくことが大切である。
- (7) 平和な世の中を作っていく。そこに一番近いところにいるのが私たち教師である。そうした気持ちや信念を持ち続け、決して諦めず、地道に実践を積み重ねていく。
- (8) 部会員数が減少してきているので、増やせるような手だてを考えていく。

(文責 松野 真也)